

(未来からの暗示)



子供の頃のことです。

夏休み、遊び疲れて帰ってきて、いつの間にか、八畳の間で寝入ってしまったようです。あるいは、お昼寝でもしよう、と思ったのかもしれない。

目が覚めると夕暮れ時でした。日が落ちていて、部屋の中は少し薄暗く、かなかな（ひぐらしゼミ）が鳴いている以外は、物音ひとつせずひんやりと静まりかえっていました。母は夕飯の総菜を求めて買い物にでも出かけたのかおりませんでした。弟や妹たちも、まだ外で遊んでいるのかやはりおりませんし、ばあさんもいつも座っている茶の間にもおりませんでした。

その時、何故かふと、言いしれぬもの悲しさに襲われました。

その頃は、まだ宇宙というような抽象的な言葉は知らなかったと思いますが、その言葉を大人になって使うことが許されるなら、本当に「宇宙にただ独り」のような感じがしたのです。

この先、どこまで行っても、誰にも会えない。誰とも繋がれない。何か知らぬ間に、みんなとの糸が切れて、独り置いてけぼりにされたような、なんとも言えないもの悲しさ、さびしさ、おそろしさ。

僕は急に心細くなって

「ねえ、みんなどこ？どこにいるの？だれもいないの？」

と、大きな声を出しました。しかし返事はどこからも返ってきませんでした。

あれはなんだったのか？何故そうまで、はっきりと覚えているのか？

そして最近、思い当たりました。

あれは、その後の僕の人生に対するぼんやりとした「未来からの暗示」だったのかもしれない、と思いついたのです。